正教会へようこそ（Welcome to the Orthodox Church）

著：フレデリカ・マシューグリーン

序章

正教会の司祭である私の夫は、初回の伝道会で必ず黒板にこう書きます。

　ここで学ばないこと「正教」

　ここで学ぶこと「正教について」

この違いは何でしょうか。人生と同じように、正教は座学で把握できるようなものはありません。本やガイドブックでは、正教会は荘厳でキリスト教初代からの長い歴史を持つ教会だと紹介されます。更に西洋目線の学校の授業では、正教会は東方に広がったキリスト教会という単純な見方で説明されるでしょう。（よく「東方キリスト教会」というような呼ばれ方をされますが、他の教派と同じように現在では世界中に存在しています。）

正教は芸術と建築、祈祷と音楽、そして深い神学と霊性の宝庫といっても過言でない豊かなキリスト教信仰です。教会に通い始めてから何年経っても新しいことに気づかされます。

「正教会について」学ぶことは山のようにあります。

しかし「正教」を学ぶということは、これとは全く別問題です。洗礼を受けた人は、正教が単なる宗教ではなく「道」だということに気づくでしょう。そして、聖堂を含め正教に関する全てのものが、その「道」を歩むために在るのです。その目的は、あなたがよりキリストの臨在と生命(いのち)に満たされるのを扶助するためです。そこには力と成長へ期待がみなぎっています。

「正教会に来るようになってどうですか？」という質問をすると、いつもこの言葉が返ってきます。「いやぁ、難しいね。」

洗礼を受けて教会に通うようになると、目にする全ての美しくかつ新しいものに何かを促されているような気持ちになります。それらのものは私たちに何かを問いかけているようです。この「気づき」を自分の人生にどう生かそうか、と。許(ゆる)せない人を赦(ゆる)せたか？自分は今日を謙虚に生きられたか？自制心はどうだろうか？今どき時代遅れかもしれませんが、罪や反省について話すのは重要なことです。人が成長していくために自分を振り返って変化することは不可欠なことです。もし想定外のことが身の上に起きたときに、まず神様に心を向ける習慣が身についていたら…私たちは日常的にやってくる「つまづきのもと」に対応することができます。

聖堂内のたくさんのイコンは、一見すると素晴らしい宗教画のように見えますが、ときにあなたの心を揺さぶることがあります。そこに描かれた人々があなたを見てこう言っているように見えるかもしれません。「私たちはここにいます。私たちはキリストに生きました。

あなたはどのように生きていますか？」

つまり正教は絶え間ない変化の道です。教会に加わった人たちは単に「正教について」だけでなく、「正教」そのものを常に発見していくことになるでしょう。

しかし正教を知るためには、実際その中に生きてみないと分からないと言われてしまったら、結局どうやっても正教に出会えないということになります。残念ながら好奇心だけで教会に入って、長く留まる方はほとんどいません。宗教に関する無料情報があふれる今日、何か変化を求める人々がひとつの決断をするのは相当大変なことです。教会に加わる気持ちがなくても、もうちょっと知りたいという方もおられます。他にも、身内や友人に正教会に加わった人がいて騒動になってしまったという方もおられるかもしれませんし、正教会で行われる結婚式などに招かれて気になったという場合もあります。この本は、そのためにあります。そしてこの私自身、まさにそのような出会いを経験した一人です。

この本を書き始めてみたら、資料が簡単にまとまらないことに気が付きました。全ての要素が互いに関わり合って、どこまでが機密でどこまでが神学あるいは歴史なのか、少なくとも私には分類できなかったのです。本来生き生きとしているものが、分類するなかで失われてしまうのです。それはまるで分類への抵抗のようで、単純なことでさえ上手くいかないのです。

一つの理由は、正教には言葉だけでは伝えきれないことが多くあるからです。歴史的に見ても、正教会は他のキリスト教派に対して、そんなに自分たちの信仰について説明してきませんでした。西ヨーロッパのキリスト教諸派は何世紀もの間、教派間で議論や論争をしてきた経緯がありますが、アフリカ・アジア・中東・東欧などの伝統的に正教が優勢な地域ではそういったことがほとんどなかったのです。この地域の人々はペルシャ人やモンゴル人、イスラムや共産主義など非キリスト教勢力からの圧力を受けたことで、教会が生活の中にあるのとないのではどれだけの違いがあるかを思い知らされていました。一方、西のキリスト教は、東のキリスト教に流れる伝承は除外したうえで長年議論を重ね、贖罪(しょくざい)など一つひとつの事柄をしっかり定義しました。

約二十年前に私たち家族が正教会に通い始めたときの話です。私たちは正教会をほとんど体験によって知りました。インターネットはまだ発達していなかったので、情報源と言えば限られた文献のみでした。そこで正教会が何を教えているのか知るために、まず祈祷の中で何が行われているのかを注意深く見るようにしたのです。

例えば、キリストの升天(しょうてん)について正教会がどう教えているのかを知りたいとき、私たちはその日のご祈祷の言葉と聖歌を聞きました。そして升天祭のイコン（イコンはいつどこで描かれたとしても同じ事柄が同じような形態で描かれている）を注意深く見ました。こうして年間の祈祷のサイクルを何度か繰り返すうちに、教会が教える様々なことが自然と身についていきました。気が付くと主の升天の意義がタボル（ファオル）山での主

の変容に関係し、創世記に記された人間の創造にまで繋がっているということを学んでいたのです。理解を深めては訂正する、それを私たちは繰り返してきたのです。

はじめはあらゆることが衝撃的でした。それまで知らなかったたくさんの神学的な解釈、そしてそれを表現する方法を教会の人々に聞き続けました。数年経つとようやく驚く回数も減り、少し分かってきただろうかと思い始めました。今でも忘れられない衝撃的な事は、神の怒りついてです。正教の方なら何とも思わないのでしょうけれども、プロテスタント教会に通っていた私には大事件でした。話を聞く中で強調して言われたのは、神が怒らないということです。お祈りの中でも、さまざまな箇所でこう言っています。「私たちはあなたの怒りに値するが、その代わりにいつも慮(おもんぱか)りを与えてくれる。」

他にも「不幸についての問題」がありました。なぜ世界には苦しみが、しかも罪のない人が苦しむのかという疑問です。これはキリスト教徒であろうとなかろうと大変厄介な問題です。これに気付くのには私は何年もかかりましたが、実は正教会ではあまり取り扱われてないのです。もちろん正教徒も誰もが苦しむように苦しみ、深く悲しみます。ただ、そこには西洋でよく行うディスカッションやカウンセリングなどで混乱や怨恨を分かち合うようなことはありません。この理由を呑みこむには相当の時間を要しました。

正教会で発見する事柄には毎回心が踊らされました。夫と私が神学校を卒業する数年前まで、一つ一つを教会の中で見たり聞いたりして、私たちは実に多くの事柄を一から考え直させられました。当たり前と思っていたようなことも見つめ直しました。当然だと思って

いた聖書の箇所にも別のスポットライトの当て方がありました。

その光の照らし方を与えてくれたのがギリシア語聖書です。ヨーロッパのキリスト教神学はラテン語訳の聖書を基礎にして成り立っています。ギリシア語原典を辿っていく中で、ラテン語で可能な表現との間にギャップがあると知りました。例えば新約聖書の中で聖パウロ（パウエル）が使用している「エネルギア」というギリシア語、英語では「エネルギー」となりますが、実はこれに相当する単語がラテン語にはありません。他にも面白い考え方の変化があったので、後で触れていきたいと思います。

うまく言葉にできませんが、正教会は何かが違うという思いだけは最初からありました。単なる明確な神学の違いだけでなく、私たちの存在や神への近づき方、そしてキリスト教徒としての在り方に至るまで、何かが根本的に異なるのです。これまで体験することのない、何とも言い難い違いを理解するまで、私は相当な時間を要しました。

その場その場で正教を学んで私は、これをどうやって人に伝えたらいいのかよく知りませんでした。そのため比較や相対が最も分かりやすい方法だと思い、一般的に知られているキリスト教信仰からアプローチして、正教との間にある差異を指し示すのが一番だと思いました。もし野球を全く知らなかったとしたら、あなたは「野球ってこんな風にボーリングみたいな感じでやるの？」とか「サッカーみたいにあんな感じでやるの？」というよう

な質問するでしょう。正教会について話をすると、まさしくその様に自分に馴染みがある宗派と私が話したことを比較しながら質問されることが頻繁にあります。

ところが、この方法は混乱を招く結果になり得ます。最初は比較する中でもおおよそ類似しているとみなした要点を、もっと深く学んでみたら全くそうではなかったということが、いくらかあったのです。聖書の箇所の解釈においても同様にあります。そもそも東方キリスト教がもつ要素のいくつかは、西方キリスト教の要素のうちに入っていません。要するにはじめからちぐはぐな状態で質疑応答することになるのです。

奇妙なことに、東方キリスト教からすると、カトリックもプロテスタントもあまり変わりなく見えます。家族でいうと従姉妹のようなこの２つの宗派は、地理的にも、歴史的にも、そして教義の論点においても、共に同じ道を歩みながら発展していきました。

しかし正教会はこの西洋の流れから外れていました。それを踏まえると、東方と西方の違いを比較する方法で説明や研究をしようとすると問題が生じるように思えます（それは私が正教側だからだと思われるかもしれません。）どうしてキリスト教徒が一致団結しようと運動しているときに「違い」にフォーカスするのかと指摘を受けるかもしれませんが、この本を読み終えたら少なくともちょっとはその違いについて関心を持つことと思います。

男性も女性も人体の構造としては大体同じであると知っていても、男女は決して同じではなく、その違いは今も昔も大きな関心事です。そのような類の関心事として捉えて頂いても結構です。

今回は残念ながら、こうした限りあるページ数の中で、ひとつひとつのテーマを徹底的に取り扱うことはできませんでした。参考文献のリストのところでは、より正教への理解を深めるためにお薦めの書籍を挙げています。現在は、私たち家族が正教会に加わった時よりずっと読み物が増えました。それでも正教会を知るためには読むより何より、体験することが一番です。本をしらみ潰しに読んで、これでもかと情報を集めることに熱中する人がいますが、私はあまり感心しません。霊的な道がどのようにして私たちに関わるのかは、実践に身を投じて自己管理しなくては理解出来ないでしょう。古代から続く正教の祈祷や聖歌や目で見える芸術は参祷する人が直接交流できるように作られています。あらゆる国と文化、ときにはその国境すら超え、その祈祷の言葉はキリスト教徒に話しかけてきます。こうした聖歌は教会の中にいる人々の心に直接届く美の力を持っています。それを考えたら、読み物は取るに足らない手段です。せいぜい私たちが学べるのはページを撫でる程度のことで、本当に学ばなければならないのは「人を読むこと」です。

聖堂の中で人々がどのように動くのかを見て、どのように言葉を発するかを聴いて、何を言って何を行うのかを考えます。このような見聞きによって、私たちは何をしているのか、そしてそれにはどのような意味があるのかを学んでいくのです。

ほとんどの人が、このように時間を積み重ねながらキリスト教信仰を体得しています。つまり本を読むのではなく、その集まりに加わるということです。その目と耳を開いて、お祈りの時間、聖書の読みの時間、説教の時間によく見聞きし、聖歌の言葉を考えます。斎(も

のいみ)(節制)の時期が近づいたら、よく知ってそうな「先輩」を見つけて、知恵を拝借して実践してみます。何をするのか周りの人をよく見たり、会話の中でどんなことが話されるのかよく聴いてみましょう。ただ言葉だけでなく、声に表れる敬意の程度なども。時が経つと、いろんなことがまとまってきます。

一言でいうと「習うより慣れろ」ということになります。人の集まりの中では、自分が話しているだけでは、ちゃんと事を学べません。また人の集まりの中では、重要なことと共にあまり重要でないことまでも一緒に知ることになるでしょう。（そもそも、その時点では何が重要で何が重要でないのかも分からないのですが。）何度も何度も、それぞれの「天使」から同じようなことを聞く中で、自分のはじめに持った思いを訂正していきます。次第にそれぞれの事がうまくかみ合うようになって、より実践に役立つようになっていきます。

本読むことより直接的な体験を重視したところで、ようやく本題に移りたいと思います。「習うより慣れろ」に則りたいところですが、本という媒体では限界があるので、この本の中に一つの架空の教会を設定してみることにしました。聖フェリシティ正教会です。（この名前については第二章で詳細に触れます。）そして私たちがそこを訪問しながら、場所や相互関係を自然に把握し、その中であらゆる項目に触れて、少しずつ知っていくようにします。

第一章は、週半ば辺りの何も行われていない聖堂を拝観することからはじめます。正教会

の聖堂の中には見どころがたくさんあります。最初は誰もいない静かな聖堂の方が落ち着いて中を見ることができます。ここでは建築構造、イコン（聖像）、祈祷、聖人などを学びます。全ての聖堂が聖フェリシティ正教会の聖堂のようになっているわけではありませんが、ここで私たちが見るのは典型的かつ学ぶために適した形にしています。

第二章と第三章では、実際に教会で行われている、晩課、主日聖体礼儀（日曜朝の礼拝）婚配式（結婚式）、葬儀等などの祈祷に参加します。また家屋の祝福を行うために、信徒宅を訪れたり、ご祈祷後のお茶の時間を過ごしたりします。この二つの章では解説するのが目的ではなく、スナップ写真のような感じで、実際どのようなことが教会の中で見られるかを紹介したいと思います。また、架空の人物ではありますが、より現実に近い形にするよう、どこの教会でも見受けられる教会に集ういろんな人々を紹介していこうと思います。

正教というキリスト教会は精神が歩む道です。一つの組織でもなければ、神学を提唱する一団体でもありません。東方正教は自己の内面の変容のための包括的な「プログラム（道）」つまり旅であり、新約聖書に記されている「道」なのです。（使徒行伝 9：2、19：9、22：4 参照）

この「道」には、例えば病院に運営委員会があるように、制度があります。病院の目的は医療を行うことが使命です。もし厳選して選出したその病院の運営委員会のメンバーに目立ったような失敗があったとしても、医療そのものに影響を与えることはないだろうと、患者たちが望みを捨てることはありません。

正教というキリスト教会は精神が歩む道です。一つの組織でもなければ、神学を提唱する一団体でもありません。東方正教は自己の内面の変容のための包括的(ほうかつてき)な「プログラム（道）」つまり旅であり、新約聖書に記されている「道」なのです。（使徒行伝/聖使徒行実 9：2、19：9、22：4）

この「道」には、例えば病院に運営委員会があるように、制度があります。病院の目的は医療を行うことが使命です。厳選したその病院の運営委員会のメンバーに、もし大失敗があったとしても、医療自体に患者たちが望みを捨てることはありません。

正教のクリスチャンは聖堂を大切にしています。何世紀も何世紀も維持されながらこの霊的な道を提示する教会を有難い存在だと思っているのです。また、もしこの地上の教会組織に不足や亀裂ができたとしても、正教のクリスチャンはそんなことで驚かないのではないかと思います。どんな時代であっても良い麦の間に悪い麦は生えることを知っています（マタイ/マトフェイ 14：20-30。）またどれだけ人間がその道を汚したとしても、長年かけて試される霊的な癒しの道は間違いなく続いていくのです。

正教の全ての指導者が聖人というわけではありません。正教の信徒全員が信心深いわけでもありません。人が教会に集う理由は様々です。また、全ての教会が自分の変化を願って馳せ参じている人々でいっぱいということもありません。（普段から通っている人には寡黙(かもく)な人も多いので、そう簡単にどのような思いで教会に通っているかを尋ねるのは難しいと思いますが。）或いはこの変化を忘れてしまっている、ないしは教わったことも考え

たこともない正教の団体もあります。

もし教会に活気がなく、何かがおかしくなっていると思えても、その「道」は有効性を保っていて、まるで聖書が開かれる時を待っているかのように、誰かがそれを試す時を待っています。あらゆる民族と部族の中にいる全ての正教徒にこの機会があります。たとえ悪い態度で教会に連なっていても、目に見えることばかりに捕らわれていたとしても、（他の教派と）掛け持ちしていたとしても、あっちの教会の人達のことを悪く言っていたとしても。

もし正教会が単一の世界組織であったとしたら、このような精神の道という働きはなかったかもしれません。そしてそのリーダーが絶対化されてしまったら、嘲笑される他ありません。正教会は一つの思想の集団でもなければ単なる組織団体でもありません。それは創造主であり救主、道であるイエス・キリストによってもたらされた、神の臨在のただ中にある道そのものです。